

# 地域社会学会ジャーナル

No. 7

(2022. 9. 27)

2022 年度第 1 回研究例会号

地域社会学会ジャーナル発行委員会

地域社会学会事務局

Office of Japan Association of Regional and Community Studies

〒480-1198 長久手市茨ヶ廻間 1522-3 愛知県立大学教育福祉学部

松宮 朝研究室内

TEL 0561-76-8706 (直) FAX 0561-64-1107 郵便振替 地域社会学会 00150-2-790728

E-mail jarcs.office@gmail.com URL <http://jarcs.sakura.ne.jp/>

## 目 次

地域社会学会 2022 年度第 1 回研究例会報告プログラム	…… 3
--------------------------------	------

### 報告論文

新型コロナ禍の中で地域社会学は何を問うたのか—その成果と残された課題— 丸山 真央……	4
--	---

ホームを問い直す—狩猟採集民とホームレスの知見から	二文字屋 脩…… 10
---------------------------	-------------

### 批評論文

「遊動」という視点と地域社会学	牧野 修也…… 17
-----------------	------------

### Regional and Community Studies beyond Borders

2007 年ブラジル調査紀行	小内 透…… 22
----------------	-----------

## 地域社会学会 2022 年度第 1 回研究例会

### 報告プログラム

日 時	2022 年 7 月 9 日 (土) 13 時～16 時
開催方法	ZOOM によるオンライン開催
司 会	清水洋行 (千葉大学)、前島訓子 (愛知淑徳大学)
報 告	丸山真央 (滋賀県立大学) 新型コロナ禍の中で地域社会学は何を問うたのか —その成果と残された課題
報 告	二文字屋 脩 (愛知淑徳大学) ホーム・イデオロギーを問い直す : ホームレスと狩猟採集民の知見から

## 新型コロナ禍の中で地域社会学は何を問うたのか

### —その成果と残された課題—

丸山 真央

#### 1. はじめに

本稿は、2020～21 年度の研究委員会（以下、当期研究委）が企画を担当した 20 年度第 1 回研究例会（21 年 2 月）、21 年度第 1～4 回研究例会（21 年 7、10、12 月、22 年 2 月）、第 46・47 回大会シンポジウム（21 年 5 月、22 年 5 月）の成果と残された課題を整理するものである。

当期は「新型コロナ禍の中で地域社会学は何を問うのか」を共通テーマとした。当初念頭にあったのは、次のような問題関心であった。

「新型コロナウイルス感染症の感染拡大（COVID-19 パンデミック）は、地域社会学にも大きな問いを突き付けている。……

この間、グローバル化やネオリベリズムの趨勢のもとで、東京をはじめとする大都市圏へのヒト・モノ・カネの集中が進む一方で、『地方創生』のかけ声をよそに、地方圏の衰退が進行してきた。しかし新型コロナ禍の中で、テレワークの拡大と定着、DX の進行など、産業・企業や労働のあり方が変わりはじめ、郊外・地方への企業移転や移住・二地域居住などに注目が集まるようになった。他面で、感染が拡大した大都市圏、とくに都心部では、人びとの行動は制限され、商業やサービス業、交通・輸送部門、観光関連産業は、かつてない打撃を受けている。

新型コロナ禍は、これまでの都市集中と地方衰退という流れを変える契機となるのか。何らかの変化が進むとして、そこでは、どのような格差や不均等が生じるのか。『生活圏』としての地域社会には、どのような影響があるのか。」

これは第 46 回大会シンポ「パンデミックと都市・地域」の企画趣旨（『会報』221 所収）の一部だが、今からみると、コロナ禍での都市や地域に関する現象や問題を列挙したばかりで、地域社会学がなぜコロナ禍を研究対象にするのかは説明できていない。

この点について筆者は今も十分な答えをもっていないが、同シンポでの次の指摘は有力な導きになると思われる。「都市・地域はグローバルから個人に至る水準を媒介・集約する……新型コロナという新しい事態の中心的舞台、政策形成の主要なアリーナ」であり「新型コロナ感染症という出来事は、すぐれて都市・地域の問題としてあった」（町村 2022）。このように、パンデミックの（社会的・科学的）理解そのものにとって都市・地域が決定的に重要な対象だという説明は、地域社会学がコロナ禍を問うことの出発点になると考えられる。

## 2. 地域社会学は新型コロナ禍の何を問うたのか

当期最初の研究例会（2020年度第1回）において筆者は「新型コロナ禍の中で地域社会学は何を問うのか」に関して問題の所在を整理する機会を得た（丸山 2021）。先の『年報』の解題（丸山 2022）と一部重複するが、そこでの整理に従いながら、当期の議論をふりかえりたい。

### ①地域コミュニティ・まちづくりをめぐる

2018～19年度研究委の企画による第45回大会（2020年11月）のシンポ『『コミュニティ』は維持されるのか』では、『『三密』こそがコミュニティや地域の活力の源泉ではなかったか。まちづくり活動は過去のものになってしまったのか』と問われたが（矢部 2021）、その問題意識を引き継ぐ論点である。

第45回大会直後は、「まちづくりやコミュニティの今後は『崩壊からの展開』に近いものになるであろう」（大倉 2021）という指摘に近い感覚を筆者も持っていた。しかし第46回大会シンポでは、小山弘美会員が東京・世田谷の事例から、「多くのまちづくり活動や地域コミュニティ活動が、コロナ禍に対応した工夫を凝らしながら活動を継続させている」こと、そして「目の前の課題に対応しながら進むという、市民活動・NPOの強み」が見出されると報告した（小山 2022）。このような地域コミュニティの姿は、コロナ禍下の地方都市の町内社会や祭礼に関する武田俊輔会員の報告（武田 2021）にもうかがえた。

こうした地域コミュニティのもつパンデミックに対する「レジリエンス」（Takeda 2022；武田 2022）の発見は、この間の成果といえるだろう。武田会員の研究は、災害研究に触発されたとのことで、地域社会学が蓄積してきたコミュニティの災害への復元力や事前対応力あるいは脆弱性に関する研究の成果が活かされたともいえる。

### ②「都市」「都市的なるもの」をめぐる

このパンデミックが「都市的なるもの」の本質、つまり集積性や流動性、多様性といったものを直撃したのではないかと問う（五十嵐 2021）との問いは、都市研究・地域研究の関心の中心になっている（cf. Bailey et al. 2020; Keil 2021; Florida et al. 2021）。

第47回大会シンポでは、討論者の中澤秀雄会員が「Urban F2F (face-to-face)」の意義を指摘し、報告者の田中輝美氏も、「都市でなければできないこと」に言及するなど、この点に関して議論が展開されたが、それについては後述する。

実際に都市は変化しているのか。たとえばコロナ禍は東京一極集中や大都市圏の過密の緩和を促したのか。2021年秋の時点で平井太郎会員は、官庁統計や自らの調査から、地方移住へのコロナの影響は限定的だと指摘していた（平井 2021）。最近発表された三大都市圏の転入超過数の推移をみても、コロナ禍で歯止めがかかっていた東京圏への転入超過は、徐々に元に戻りつつあるようにみえる（総務省統計局「住民基本台帳人口移動報告 2022年（令和4年）5月結果」）。今しばらく動向を注視し、データに基づく検証を続ける必要でありそうだ。

### ③格差と不平等、不均等性をめぐる

今回のパンデミックの「社会的・空間的不均等性」（Bailey et al. 2020）については、

空間的な面だけみても、都市／地方、都心／郊外などで、感染者・死者数、経済的インパクトなどの不均等性があるとみられ、この点には世界的にも関心が集まっている (e.g. Biglieri et al. 2020; Trasberg and Cheshire 2021)。日本でも地理学等で実証研究が進んでいるようである。

ただ本学会では、継続的な関心は根強くあるものの、実証研究を含めて蓄積が十分といえない。今後の研究が俟たれるテーマのひとつであろう。

#### ④都市・地域の政策・ガバナンスをめぐって

コロナ禍をめぐる都市や地域の政策・ガバナンスについて、「このパンデミックは……ネオリベラリズムの40年の後に直撃した」(Saad-Filho 2020)との指摘があるが、このことに関わって、第46回大会シンポでの議論は有益であった。松田亮三氏は、COVID-19を含む新型感染症がもつ「不確実性」や「揺らぎ」を指摘したうえで、それらを織り込んだ公衆衛生政策が欠落しているとして、このパンデミックのガバナンスの根本問題を衝いた(松田 2022)。町村敬志会員は、コロナ禍の政策・ガバナンスの特徴は、政府が社会全域に「介入」する「新しい介入主義」だと指摘し、「新自由主義の『危機』に際して『新たな介入』が試された」と論じた(町村 2022)。筆者も別の機会に、地方自治体のコロナ対応を検討するなかで、ネオリベラリズムの経験の影響を考えたことがある(Maruyama 2022)。

コロナ禍が露わにした都市・地域の感染症ガバナンスの諸問題は、まだ国外でも研究が充実しているとはいいいがたい。さらに事例の検討を踏まえた議論が期待される。

#### その他の論点

以上のほかにも、丸山(2021)ではいくつか論点を指摘していたので、簡単に触れておく。

⑤「復興」をめぐって。コロナ禍からの「復興」を論じるのは時期尚早かもしれない。しかし災害・復興研究の蓄積をもつ本学会としては、「ショック・ドクトリン」型の「創造的復興」路線のもつ問題性を熟知しているがゆえに、批判的な視点を大事にしながら注視していくことが期待される。

⑥方法論をめぐって。これは、パンデミックの地域社会学の方法として国際(地域間)比較と歴史(時点間)比較が重要ではないかとの論点であるが、ここに他の学問分野との協働を加えてもよいだろう。2021年度第4回研究例会では、大倉健宏会員が社会疫学と地域社会学を架橋する「コミュニティ疫学」の実践を報告した(大倉 2022)。このような隣接諸学との協働の機会にコロナ禍がなる可能性があるし、それは地域社会学の可能性を広げることにもつながるのではないだろうか(cf. 徳田 2022; 齊藤 2022)。

⑦研究実践をめぐって。コロナ禍で困難になったフィールド調査に関しては、2021年度第3・4回研究例会での連続企画「コロナ禍の中の地域社会学の研究実践と教育実践」で議論が展開された。デジタルデバイドを活用した調査やマルチメソッドの調査(阿部ほか 2022)、授業・実習でのオンライン利用(山口・丸山 2022)の可能性と限界が論じられたが、技術論に陥るべきでないという前提(土居 2021)を踏まえたうえで、「対面調査だからこそ得られる『あやふやな』データ」(坂口 2022)の意義をさらに考えていくことが必

要と思われる。この点は、第 47 回大会シンポでの中澤会員の指摘のように、研究実践だけでなく、先に述べた「都市的なるものは何か」、つまり多数が対面するという都市空間の（オンラインに対しての）優位性を考えることにもつながるだろう。

### 3. 第 47 回大会シンポジウムをふりかえって

第 47 回大会シンポは「新型コロナ禍の中の『移動』と地域社会」をテーマとした。これは、「新型コロナ禍の中で地域社会学は何を問うのか」について、「移動（モビリティ）」という補助線を引くことで焦点を絞ろうとするものであった。報告は、徳田剛会員による「コロナ禍による『移動社会』の変質——『モバイルな生活』の描写から」、田中輝美氏（非会員＝当時）による「新型コロナウイルス感染拡大の影響による国内移動（モビリティ）の変容」、二階堂裕子会員による「国際移動の制限下における外国人技能実習生の受け入れ社会——コロナショックから考える外国人労働者受け入れのあり方」の 3 本、そして中澤秀雄会員と陸麗君会員が討論者を務めた。

各報告の内容と議論は批評論文（新原 2022；菱山 2022）が的確にまとめているので、ここでは上述の論点とつなげる形で 3 点指摘したい。

まず、「都市的なるもの」に関して。コロナ禍で加速した経済・社会のデジタル化は、中澤会員のいう「Urban F2F」の意義を浮き彫りにすると同時に、その価値を再審することにもなった。オンライン会議をはじめ対面以外の出会い方の選択肢が増えたことで、これまで問われなかった対面性の価値とコストが秤量されるようになったということである。田中報告で指摘されたように、「観光以上、定住未満」の関係人口は、デジタル化によって裾野が広がり、「対面／非対面」という二分法によらない、多様な中間的・混合的な「関係」がみられるようになってきているという。そうしたなかで、対面性や物理的接触、物質的身体の意味や価値を、資本、国家、労働者、生活者、移動者、それぞれが秤量していくことになるのだろう。またそうしたなかで、「都市的なるもの」の再審は進行していくのではないだろうか。

第二に、やはり「都市的なるもの」に関する論点であるが、コロナ移住やライフ・マイグレーション、関係人口の増加といったこの間のトレンドは、都市と地方の力関係に変容を迫るのか。先にも述べたように、今しばらく動向を注視する必要があるが、都市・農村関係論を濫觴のひとつとする地域社会学にとって、さらに議論を深めるべきテーマではないかと考えている。

第三に、格差・不平等について。徳田報告では「移動社会」における分断の様相が指摘されたが、菱山宏輔会員も指摘するように、シンポでは議論が深められなかった（菱山 2022）。移動（すること・できること）を資本のひとつと捉える視点は、その配分や格差を理解するうえで重要になるだろう。それは個人間だけでなく地域間の格差を明らかにすることにもつながるだろう。今後のさらなる議論と実証に期待したい。

### 4. 終わりに

第 46 回大会シンポの批評論文で伊藤嘉高会員が、感染症と地域社会の関係を分析する際のアッサンブラージュ論やアクター・ネットワーク理論の可能性に言及していたが（伊藤 2021）、こうした新たな理論枠組や方法論に関して、当期の研究活動では十分に議論で

きなかった。このことは反省点であり、個人的にも心残りである。今後の機会を期待したい。

最後になるが、当期の研究例会と大会はすべてオンライン開催となったのにもかかわらず、会員の皆様のご協力によって有意義な議論の場となった。コロナ禍前の対面開催と同程度、時にはそれ以上の参加者があったことは、研究委員会にとって大きな励みになった。会員の皆様に改めて感謝を申し上げて、本稿を閉じたい。

**参考文献**（※以下、『会報』は『地域社会学会会報』、『年報』は『地域社会学会年報』、『ジャーナル』は『地域社会学会ジャーナル』の略）

阿部友香・野村実・丸山真央, 2022, 「コロナ禍の中の地域社会学の研究実践と教育実践——(2) フィールド調査をめぐって」『ジャーナル』 5.

新雅史, 2021, 「コロナ禍における『連帯』と『社交』」『会報』 219.

浅野慎一, 2021, 「パンデミックと都市・地域——新型コロナ禍の中で地域社会学は何を問うのか：地域社会学会第46回大会シンポジウムをふりかえって」『ジャーナル』 2.

Bailey, D., et al., 2020, “Regions in a time of pandemic,” *Regional Studies*, 54(9).

Biglieri, S., et al., 2020, “City as the core of contagion? Repositioning COVID-19 at the social and spatial periphery of urban society,” *Cities and Health*, doi: 10.1080/23748834.2020.1788320.

土居洋平, 2022, 「コロナ禍の中の教育実践の試行錯誤共有の意義」『ジャーナル』 4.

Florida, R., et al., 2021, “Cities in a post-COVID world,” *Urban Studies*, doi: 10.1177/00420980211018072.

早川洋行, 2021, 「コロナ禍の衝撃とは何か」『ジャーナル』 2.

平井太郎, 2021, 「大都市—地方間の移動／関係への感染症拡大のインパクト」『ジャーナル』 2.

菱山宏輔, 2022, 「新型コロナ禍を背景とした移動の諸相とモビリティ論の視座」『ジャーナル』 6.

五十嵐泰正, 2021, 「COVID-19 パンデミックとオーバーツーリズム——東京都台東区の計量調査から」『年報』 33.

伊藤嘉高, 2021, 「コロナ禍における『地域社会』の共同性／公共性」『ジャーナル』 1.

岩永真治, 2021, 「コロナ禍の地域社会において何が問題になっているのか——行動性向としての『健康』『介入』『まちづくり』に関する社会学的分析」『ジャーナル』 1.

Keil, R., 2021, “COVID-19: Pandemic on an urban planet,” G. J. Andrew et al. eds., *COVID-19 and Similar Futures: Pandemic Geography*, Springer.

小山弘美, 2022, 「コロナ禍におけるまちづくり活動の継続と展開に関する一考察——世田谷区まちづくり活動を事例に」『年報』 34.

町村敬志, 2022, 「新型コロナウイルス下における新たな『介入の政治』とその都市的意味」『年報』 34.

丸山真央, 2021, 「新型コロナ禍の中で地域社会学は何を問うのか」『会報』 220.

丸山真央, 2022, 「パンデミックと都市・地域——新型コロナ禍の中で地域社会学は何を問うのか」『年報』 34.



- Maruyama, M., 2022, "Urban governance of the COVID-19 pandemic in Japan: An urban political sociological approach to the case of Osaka," *Japanese Journal of Sociology*, 31(1).
- 松田亮三, 2022, 「揺らぎを公衆衛生対応に織り込む—日本における新型コロナウイルス感染症への2020年の対応から」『年報』34.
- 根本雅也, 2021, 「都市における厄災の意味—『ヒロシマ』をめぐる力学」『ジャーナル』3.
- 新原道信, 2022, 「『移動』の時代／時代の『移動』を生きる人が意味を問うことの意味」『ジャーナル』6
- 魯ゼウオン, 2021, 「韓国における新型コロナ対策の展開と地域社会の動向」『ジャーナル』2.
- 大倉健宏, 2021, 「終わりであり、空隙であり、はじまりであり」『会報』219.
- 大倉健宏, 2022, 「コミュニティ疫学試論再考—地域研究はラブコールに応えられるか」『ジャーナル』5.
- Saad-Filho, A., 2020, "From COVID-19 to the end of neoliberalism," *Critical Sociology*, 46(4-5).
- 齊藤綾美, 2022, 「『コミュニティ疫学』が含意するもの」『ジャーナル』5.
- 坂口奈央, 2022, 「対面調査だからこそ得られる『あやふやな』データの本質について」『ジャーナル』5.
- 武田俊輔, 2021, 「コロナ禍における都市祭礼継承の困難と模索—地方都市の共同性と資源調達への影響をめぐる中間考察」『会報』220.
- 武田俊輔, 2022, 「COVID-19下における祭礼・民俗行事の現状をどう分析するか—長浜曳山祭の縮小開催を事例として」日本生活学会 COVID-19 特別研究委員会編『COVID-19の現状と展望—生活学からの提言』国際文献社.
- Takeda, S., 2022, "Continuation of festivals and community resilience during COVID-19: The case of Nagahama Hikiyama Festival in Shiga Prefecture, Japan," *Japanese Journal of Sociology*, 31(1).
- 徳田剛, 2022, 「社会調査と疫学の方法論的対話」『ジャーナル』5.
- Trasberg, T., and J. Cheshire, 2021, "Spatial and social disparities in the decline of activities during the COVID-19 lockdown in Greater London," *Urban Studies*, doi: 10.1177/00420980211040409.
- 築山秀夫, 2021, 「コロナ禍による社会的事実の変容と方法の模索」『会報』220.
- 矢部拓也, 2021, 「コロナ時代における地域社会の断絶と未来—『コミュニティ』は維持されるのか」『年報』33.
- 八木寛之, 2021, 「コロナ禍の地域社会を捉えることとコロナ後を展望すること」『会報』220.
- 山口博史・丸山真央, 2022, 「コロナ禍の中の地域社会学の研究実践と教育実践—(1) 調査実習をめぐって」『ジャーナル』4.

## ホームを問い直す

### 狩猟採集民とホームレスの知見から

二文字屋 脩

#### 1. 遊動という視点

本稿は、2022 年 7 月 9 日（土）にオンラインで行われた地域社会学会 2022 年度第 1 回研究例会での報告内容をまとめたものである。なお、筆者の専門は文化人類学であり、社会学とは隣接する学問領域であるものの、とりわけ地域社会学に関しては門外漢である。だが、本年度の地域社会学会のテーマが「流動性」であると聞き、筆者自身の研究テーマと当たらずといえども遠からずということで報告依頼を引き受けることとした。どうか。まずは筆者の研究対象と研究テーマの簡単な紹介から議論を始めたい。

筆者が学部生の頃から現在まで一貫して関心を寄せているのは、「生活拠点の頻繁な移動」を意味する「遊動 (nomadism)」である。とりわけ遊動を基本的な生活スタイルとする人間存在に魅力を感じてきた。中心 (= 特定の生活拠点) を前提としない彼らの生活世界が、定住を前提とする現代社会を問い直すきっかけになるのではないかという直観的洞察があったからである。そこで学部時代には日本のホームレスを、そして大学院進学以降はタイ北部の狩猟採集民ムラブリを研究対象とし、現在に至っている。

これまでに得た知見の一つとして、「特定の場所を前提としない社会関係のあり方」がある。例えば前の職場である早稲田大学で学生たちとともに上梓した『トーキョーサバイバー』（二文字屋 2022）では、新宿駅周辺で路上生活をするホームレスの生活世界を人類学的視点から描き出すことで、私たちが自明とする「ホーム」を相対化する試みを行った。次節で論じるように、本書では彼らに欠如 (レス) しているとされる「ホーム」が、特定の場所、別の表現で言い表すならば (文字通りの意味であると同時に隠喩的な意味でも) 「アドレスを有する場所」を前提としていることを批判的に考察することとなり、またそのような場所を必ずしも前提としない「ホーム」のあり方を路上で見出すこととなった。

ちなみに、このような知見は、筆者が大学院進学以降から研究対象としている狩猟採集民についても当てはまる。後述するように、長らく遊動生活を送ってきた彼らの社会関係もまた、特定の場所を前提としない。そこには定住生活を送る私たちとはまた別様の生のあり方がある。つまり遊動に根ざした人びとの生活世界から私たちの生のあり方を逆照射してみると、私たちが自明とする「ホーム」が定住民的発想に根ざしたものであるということが理解できるのである。

#### 2. 定住民的概念としての「ホーム」

先に、ホームレスを通して特定の場所 (あるいは「アドレスを有する場」) を必ずしも前提としない「ホーム」のあり方を見出したと述べたが、「アドレスを有する場」とは具体的にどのようなものであるのか。このことを理解するために、私たちが自明とする「ホー

ム」について見ていこう。

自身も長らくホームレス支援に関わっている社会評論家の生田武志らは、経済の貧困と関係の貧困が重複したところに「現代の貧困」があると指摘している（生田・北村 2013）。そして物質的で経済的なものに根ざした家が欠如したハウスレスという状態だけでなく、非物質的で社会的なものに根ざした「ホーム」（ここでは人間関係とほぼ同義）が欠如した状態として「ホームレス」を定義する。すなわちホームレスとは、「家がない」という意味でのハウスレスに加えて、そうした場所を起点に構築される、「私」という存在を承認する他者との関係を持たない状態にある人びと、ということである。「ホームレスは孤独な人びと」といった一般的なイメージは、おそらくこうした認識に基づくものだろう。

だが現実はそのほど単純ではない。例えば『トーキョーサバイバー』に登場する、新宿駅周辺で寝起きしているヨロズヤさんという男性は、かつて公務員として働いていたことから年金を受給しており、さらに帰ることのできる家もある。しかしお金と家があっても、彼は路上で寝泊まりしている。彼曰く、家（ハウス）にはつながりがない、つまりホームがないからだと言う（藤賀 2022）。また、同じく新宿駅周辺で寝起きしているみっちゃんという男性は、生活保護を受給しているため、生活費も家もあるが、それでも頻繁に新宿に来ては路上で寝泊まりしている。その理由を問うと、「あんなの意味ねえ」と吐き捨てるように口にする（須賀 2022）。概して、ヨロズヤさんと同様に、みっちゃんもまた、家（ハウス）をホームとは見做していない。

ちなみに、こうした事例は決して珍しいことではない。例えば生活保護などを受給して「社会復帰」した人びとが後になって路上に戻るという再路上化は、支援者や研究者たちによってすでに指摘されている。そこにあるのは、アパートに入居することで却って孤独を招いてしまうという逆説だが、少なくともこうした事例から理解しうるのは、「路上にもホームはありうる」ということ、しかしそうしたつながりは「ホーム」とは一般的に見做されないということである。だからこそ私たちは自分たちのことを「ホーム」とは自称しないが路上生活者を「ホームレス」として一方的に名指すわけだが、ここには私たちが自明とする「ホーム」の特徴を見出すことができる。すなわち、「マイホーム」といった表現に象徴されるように、私たちは所有とそれに伴う排他的な成員権が付与されるような場所、例えば家屋といった物理的な場所と、そこを起点に生起する他者との関係性を私たちは前提としているということである。言うなれば、容器としての空間に内容物としての関係が充填されていることが、私たちが考える「ホーム」である。

とくに日本社会においてこうした関係は、血縁・地縁・学縁・職縁などの「縁」として表現され、これまで様々なシーンで重要視されてきた。「無縁社会」という言葉が流行語大賞に選ばれるほど大きな反響を呼んだのは、そうした自明性の証左と言えよう。そしてこうした縁を保証するものとして、家や地域、学校や職場といった「アドレスを有する場」がある。

しかしながら、そのような意味での「ホーム」は決して普遍的なものではない。それどころか、遊動を前提とする人びとの視点から見れば、極めて特殊であるとさえ思えてくる。そこで、「縁」に象徴される「ホーム」を相対化すべく、狩猟採集民に視点を移してみたい。

### 3. 狩猟採集民にみる「中心なき生」

狩猟採集民とは、狩猟と採集、さらには漁労などを生業とする人間集団のことだが、狩猟採集民は遊動民でもある。彼らの生業様式は、農耕や牧畜といった食料を自ら生産するようなものではなく、自然環境が生み出す食料資源を一方的に採取していくものだからである。つまり一箇所に定住してしまえば周囲の資源は自ずと枯渇してしまうが、この問題を解消するために、彼らは資源がより豊富な場所へと頻繁に移動する。だが、遊動が持つ意味は、こうした生態学的適応だけではない。

例えば考古学者の西田正規は、遊動の機能と動機を、(1) 安全性・快適性の維持：悪天候や不衛生さからの回避、(2) 経済的側面：食料の獲得や交易、(3) 社会的側面：不和の解消や情報交換、(4) 生理的側面：肉体的かつ心理的に適度な負担をかける、(5) 観念的側面：穢れや災いからの回避という、五つの側面から説明している(西田 2007)。

安全性・快適性の維持とは、台風や洪水など、天候の悪化で現在の場所に住めなくなったりした際により快適な場所に生活の拠点を移すことである。そして経済的側面とは、食料資源の獲得や交易を可能とするための生活拠点の移動であり、三つ目の社会的側面とは、メンバー同士で争いごとが起きた際に、暴力や話し合いといった手段ではなく、当事者同士がその場から立ち去る、つまり今の生活拠点を別の移すことで、当事者が物理的に移動し、問題の解消を試みることを指す。さらに四つ目の生理的側面とは、頻繁に移動することが、肉体的かつ心理的に適度な負担をかけること、つまり身体能力の向上や維持、そして新しい情報を受け取ることで心身を活性化させることであり、最後の観念的側面とは、成員の死に直面した際に私たちが感じる穢れに対する忌避感情を、その場から離れることで解消することを指す。

ここで重要なことは、上記のリストだけを見ても、「遊動とは単なる生活拠点の移動ではなく、狩猟採集民の生活全般に深く関わる生活様式である」ということである。逆に、私たちが自明とする定住とは、これら遊動によって担保されてきたものを、別の何かで代替することで初めて可能となる生活様式ということになる。例えば定住生活では、台風から身を守るために強固な家屋を作らなければならない、餓死しないために食料を生産し続けなければならない。また、争いごとを解決するためには第三者や法律といったものを必要とし、穢れという観念を処理するために墓場の設置や葬儀といった儀礼を作り出す必要がある。定住生活とは、「その場を離れる」だけの遊動に比べて圧倒的に労力のかかる生活様式なのである。しかし狩猟採集民は、遊動というきわめてシンプルな行動だけで、これらすべてをいとも簡単に解決してしまう。なお、西田は狩猟採集が人類史の大半を占めてきたという考古学的事実に照らしながら、「人類が獲得してきた肉体的、心理的、社会的能力や行動様式は遊動生活にこそ適したものであったと予想することもできる」(西田 2007: 17)と指摘する。つまり人類史という視点から見た場合、狩猟採集の時代は実に99%以上を占めるが、そのことを念頭に考えれば、特定の場を私有化し、そこに強固な生活拠点を築き上げる定住こそが私たち人間にとって例外的な生活様式ということである。

では、定住の特殊性を理解した上で、私たち人間が長らく拠ってきた遊動に根ざす社会関係の特徴について見ていこう。なお、遊動には集団を単位としたものと個人を単位としたものがあるが、ここでは遊動のダイナミズムを理解するため、個人を単位とした遊動に注目し、それがどのような社会関係を生み出すのかについて見ていきたい。

西田の議論でも見たように、遊動は実に様々な要因によって生じるが、どのような要因であっても、生活拠点の頻繁な移動は社会成員の離合集散を生み出すこととなる。そのため狩猟採集民の社会組織はとて流動的で可塑的であると言われるが、その具体的な特徴として非排他性・非持続性・非場所性という三つの特徴を挙げたい（二文字屋 2020: 139-140）。

非排他性とは、集団に自由に参与／非参与できるということを意味する。成員が頻繁に入れ替わるため、特定のメンバーシップを個人に付与することは価値を持たない。だからこそ、非参与者を咎める者も、参与者を拒絶する者も存在しないことになる。そして二つ目の非持続性とは、頻繁な遊動ゆえに特定の関係が持続しないことを意味する。成員はそれぞれに関係性を構築しながらも、それは決して長く続くことはない。そして最後の非場所性とは、関係が特定の場所に根ざしていないことを意味する。頻繁な遊動ゆえに場所を占有することが価値を持たないからこそ、誰がどの集団に参加するのか、またいつ集団から出ていくのかは自由ということになる。

筆者が研究対象とするムラブリにおける具体的な民族誌的事例について拙論（二文字屋 2020）を参照いただきたいが、例えばムラブリでは村と村との移動は決して珍しいものではなく、別の村に移住するにも誰かの許可をもらうこともなくそのまま村に住み着くことが度々観察される。またある程度の関係性を築いても誰がいつ村を出ていくかは分からず、仮に村を出て行っても誰もそのことを咎めることなくその現実を受け入れる。そしてこうした社会関係が可能なのも、特定の場所に対する愛着などを持たないからである。

こうした特徴の中で、本論に深く関わるのは非持続性と非場所性であるが、ここで再びホームレスへと目を向けてみると、路上での人間関係はまさにムラブリのそれととても類似していることが理解できる。例えば路上では、自分と同じような境遇にある人びと、そしてその中でもとくに交友関係がある人びとに対して「仲間」という言葉がしばしば使われる。また、会うたびによく挨拶や会話を交わす一般市民のことを「知り合い」などと表現したりするが、いずれにおいても、こうした具体的な他者との関わり合いが、彼らにとっての「ホーム」を形成している。だがそうした関係は、決して持続性や場所性をもつものではない。彼らもまた特定の場所に根差した生活を送っていないからであり、また様々な理由で生活拠点を定めるたびに既存の関係性は一新ないし変更を余儀なくされるからである。

こうした事例を経由して得られる知見は、私たち人間が身体という物質に根ざしている以上、他者との関係構築には必ず何かしらの場所を必要とするものの、だからといって家や地域、学校、職場などの「アドレスを有する場所」は、他者との関係構築において必須の要件ではないのではないかと、ということである。

浅学を承知の上でだが、例えば都市化によって社会の流動性が高まるといった場合、管見の限り、そこではどうしても従来あった人間関係ないしコミュニティが喪失あるいは崩壊している、あるいはそこまで言わずとも変容しているという認識が広く認められているように思える。もちろん、そうした認識が誤りということではない。ただ、遊動から見れば、そこでの社会関係や人間関係を基軸とするコミュニティの質的变化は、それほど危惧するものでも、また憂慮するものでも、あるいはやや極端に言ってしまうと「問題」ですらない。むしろ特定の場所を前提とする見方、あるいは社会関係や人間関係には特定の場

所が必要であるという見方を採用してしまえば、ムラブリやホームレスにみるような、他者との関係構築をめぐる別様のあり方を看過してしまうことになるだろう。

概して、筆者のささやかな主張を示すならば、特定の場所を前提としない形での社会関係なり人間関係を捉える視点が必要ではないか、ということである。ただ、それは単に路上における「ホーム」を認めよと主張することではない。そうではなく、特定の場所を暗黙の前提としない視点こそが、都市化などに起因する流動性の高まりや、産業構造の大幅な変革による不確実性が高まりを見せる現代社会において、「無縁」という言葉に代表されるようなつながりの希薄化の進行などに影響されるのではない、他者との関係構築は如何にして可能であるかという問いへと私たちを誘うものであると考えているからである。

#### 4. 場所から関係へ

この問いを議論するための手がかりとして、ここでは二者関係と単独性、そして真正性の水準について触れておきたい。

まず二者関係とは、理論的には哲学者であるマルティン・ブーバーの言う「我-汝」の関係性を想定している（ブーバー 1978）。「私」という存在が独立したものではなく、常に他者との関係において立ち現れるとするブーバーは、そのような関係を「我-汝」と概念化した。それは根源的で直接的で全人格的なものであり、対話を中心とする具体的なやりとりを通して生み出される関係を指す。対話という反復が、他者を呼びかけ、他者に呼びかけられるという、言うなれば「1.5 人称」のような関係を作り出すものと理解して良いだろう。

そしてそのような他者は、思想家である柄谷行人が概念化した「単独性」(singularity)を有することになる（柄谷 1994）。単独性とは代替不可能で比較不可能な存在の性質のことであり、もっと平易な言葉で表現すれば「かけがえのなさ」である。その例えとして柄谷は、失恋した友人を慰める場面を取り上げている。失恋した友人を慰めようという善意から、「女は他にもいくらでもいるからよくよするな」と私が友人に声をかけたとする。しかし柄谷はこの慰め方を不当であると指摘する。友人にとって元恋人の女性は、私が考えているような「女性」という一般的なカテゴリーに還元しうる存在ではないからである。つまり友人にとって彼女は他の女性に取って代わるような存在ではない。

そしてこうした二者関係や単独性は、人類学者のレヴィ＝ストロースのいう「真正性の水準」(levels of authenticity)においてこそ可能になる（レヴィ＝ストロース 2005）。真正性の水準とは、対面的な状況において相手をその全体として理解するコミュニケーションの質のことである。レヴィ＝ストロースは、500人で構成される社会、すなわち真正性の水準にある社会のコミュニケーションについて、それが対面的あるいは顔の見える状況であるために、目の前の他者はその全体として理解されるのだと指摘する。一方、彼が非真正性の水準という5000人の社会ではそうはいかない。端的に人が多すぎるため、人びとはマスメディアといった非対面的な媒体を通してでしかお互いを知ることができず、知り得たとしても他者を具体的かつ直接的には知り得ないため、一般的なカテゴリー、例えば「ホームレス」と言ったカテゴリーに還元することでしか他者を理解できない。

こうした他者との関係をめぐる議論で重要なのは、ここで挙げた三つの要件を満たす他者との関係が、(繰り返しになるが) 必ずしも特定の場所を要件とはしないということであ

る。「必ずしも」とあえて付したのは、定住を前提とする私たちにとって馴染みのある、特定の場所を起点に生起する関係構築を否定するものではないからだが、これはつまり血縁や地縁、学縁や職縁といった他者との関係構築も十分にありうるものの、人と人がつながりを構築する上で重要なのは、如何に目前の他者に呼びかけ、また呼びかけられながら、一般的なカテゴリーに還元されることのない単独性をもった関係を構築するかということになる。逆に特定の場所を要件とする見方を前提としてしまうことで、私たちは他者と如何につながりうるのかという、人間存在にとって極めて重要な問いを見逃してしまうという過ちを犯すことになるだろう。

## 5. おわりに

本論では、「ホームレス」の言外の意味としての「ホーム」が、単なる他者とのつながりではなく、特定の場所を要件とする性質があることを見出した上で、そのようなホーム観を相対化するために、狩猟採集民とホームレスの社会関係について見てきた。そして特定の場所を必ずしも必要としない、より根本的な他者との関係構築のあり方を考えるため、二者関係・単独性・真正性の水準という三つの概念を外観した。

こうした作業を行った背景には、ネオリベリズムによって個人化が徹底されると同時に社会的連帯の破壊が進行する今日の社会状況において、あらゆるものを比較可能で代替可能なものとみなす権力やシステムに如何に抗するのかという手がかりを探りたかったからである。人類学者の小田亮が論じているように、代替不可能で比較不可能な他者との個別具体的な関係こそが、世界の均質化や数量化に抗う方法となるだろう（小田 2009）。

そしてその具体的な方策の一つを、遊動は私たちに提示しているように思われる。なぜなら筆者がこれまで見てきたムラブリやホームレスは、動くことそれ自体ではなく、動くことを厭わないからこそ、新たな他者との出会いを可能とし、そこに生きる意味を見出し今日に至っているからである。もちろん、時と場合によっては動かざるを得ないという状況もありえるが、特定の場所に縛られることがないからこそ担保されるフットワークの軽快さは、刻一刻と変化する可変的な状況を生きぬくための武器であると同時に、新たな他者との個別具体的な出会いを可能としている。

だが単に動けばいいというわけではないところには注意が必要だろう。ムラブリもホームレスも、実際に動くかどうかよりも、動く必要がある時に、すぐに動くことができるように身構えていることを重視しているからである。例えばホームレスは、今寝起きしている場所からいつ排除されても良いように常に代わりとなる寝場所を確保し、いざと言うときはさっさと寝床を移動する。そして移動先でまた新たな他者との関係を構築し、そこにまた新たなホームを見出していくことで、路上における生を可能にしている。

しかし定住を前提とする、より正確に言えば特定の場所への帰属を重視する私たちには、そうした動きが可能にする新たな他者との出会いの機会が相対的に少ない。とくに何か新しいことにチャレンジすること自体が高いリスクをもつように理解される今日の社会状況において、動くことのハードルはより一層高くなっているようにも思える。しかしそのことが却って既存の場所を出ていくことを阻み、社会に閉塞感を生み出している要因になってはいないだろうか。重要なのは、動くべき時に動けるように身構えておくことである。その意味でムラブリやホームレスの身構えに、私たちが学ぶことは決して少なくない。

## 参考文献

- 生田武志・北村年子, 2013, 『子どもに「ホームレス」をどう伝えるか: いじめ・襲撃をなくすために』 太郎次郎社エディタス.
- 小田亮, 2009, 「『二重社会』という視点とネオリベラリズム—生存のための日常的実践」 『文化人類学』 74(2): 272-292.
- 柄谷行人, 1994, 『探究Ⅱ』 講談社.
- 須賀美和子, 2022, 「都市のスキマに座る」 二文字屋脩 (編著) 『トーキョーサバイバー』 うつつ堂, 84-92.
- Buber, M., 1923, Ich und Du (田口義弘訳, 1978, 『我と汝』 みすず書房) .
- 藤賀樹, 2022, 「あげっぱなしの見返りいらず」 二文字屋脩 (編著) 『トーキョーサバイバー』 うつつ堂, 94-101.
- 西田正規, 2007, 『人類史のなかの定住革命』 講談社.
- 二文字屋脩, 2020, 「〈動き〉を能う: ポスト狩猟採集民ムラブリにみる遊動民的身構え」 『年報人類学研究』 10: 134-154.
- 二文字屋脩 (編著), 2022, 『トーキョーサバイバー』 うつつ堂.
- Lévi-Strauss, C., 1986, L'anthropologie face aux problèmes du monde moderne (川田順造・渡辺公三訳, 2005, 『レヴィ=ストロース講義—現代世界と人類学』 平凡社) .



## 「遊動」という視点と地域社会学

牧野 修也

### 1. はじめに

本稿は、2022 年 7 月 9 日に、オンラインで行われた地域社会学会 2022 年度第 1 回研究例会での 2 つの報告を踏まえてのものである。第 1 報告は、地球規模での新型コロナウイルス禍となった 2020 年から 2021 年までの 2 年間の地域社会学会での議論を総括し、今後の課題になり得るものを提示していくものであった。第 2 報告は、文化人類学の視点から「遊動 (nomadism)」をキー概念として、2022 年度の地域社会学会のテーマの 1 つである「流動 (mobility)」を問うていくという極めて刺激的な試みであった。

2 つの報告の背景には、2020 年以來の新型コロナウイルス禍の問題があることは、改めて指摘するまでもないことだろう。コロナ禍において、これまでの日常性が担保されず、きわめて強制的に変更させられることを余儀なくされた。そして、2022 年 8 月末現在、かつての日常が非日常となり、強制的に変更させられたものが日常化している感も強い。

しかし、日常が非日常化し、非日常が日常化したという見方を提示したが、はたして、そうと言えるであろうか。もちろん、「何もかもが変わった」／「何も変わっていない」という二分法的な思考はあまり有意味とは言えない。「コロナ禍で変わったように見えるが、これまでも生じていたことが可視化した」こと、「コロナ禍が過ぎれば、コロナ禍以前に戻る」こと、「コロナ禍で変わり、コロナ禍収束以降も継続していく」ことと分けて考えていく必要があるのではないだろうか。

本稿においては、以上の点を意識しながら、議論を進めていきたい。

### 2. 遊動という概念をどう捉えるか

二文字屋報告においては、「遊動」という概念がキーワードとなった。報告者の説明によると、「遊動」とは「生活拠点の頻繁な移動を伴う生活様式」を指すという。人類学の領域では、1960 年代以降、しばしば使われる概念であるという。報告にあったように、狩猟採集民や遊牧民の生活を捉えるには非常に魅力的な概念である。確かに、必要に応じて、生活の拠点を頻繁に移動するというライフスタイルは、「定住」を前提とする地域社会の捉え方とは異なるように、一見、見える。いささか古い議論になるが、かつて、「移住一定住」のプロセスが地域社会を考える時の視点の 1 つであったように思う。ただ、この視点では、「遊動」という概念を捉えることはできないであろう。

「移住一定住」という視点では、文字通り、生活の拠点は 1 つであり、移動は途中経過であって、最終的には、いずれかの場所に定着しなければならない。言い換えれば、定着できない場合、「流転」という言葉が与えられることもあるであろう。「遊動」の場合、1 つの地域社会に定住することは前提ではない。複数の場所を、その時のそれぞれの事情に応じて、自分で選択して居住するという概念であると、筆者は理解した。二文字屋は、報告

の中で、「遊動」というライフスタイルによって、社会成員の集合離散によって、社会組織に流動性や可塑性が生まれると指摘した。そのことによって、集団に対する自由度が高まり、関係性も一時的であり、その場にいる／いないの選択が可能になるとする。むしろ、このことは、個々人が原子化し、“社会的つながり”が存在しないことを意味するものではない。複数の関係を、選択的に選び取っていかうとするものであり、“緩やかなつながり”としてある。

こうした関係は、これまで、地域社会を考える時に前提となっていた血縁や地縁という関係性を相対化する可能性を有しているように思われる。先に触れたように、移動する人びとの生活を捉えてこなかったわけではない。だが、そこには、それ以前から、そこに暮らしてきた人びととの間での「同化」「葛藤」「共生」ということを通じての定住を、また、新住民だけの地域社会においても、異質な者同士が「コミュニティ」を形成していくのかという背後仮説があったように思われる。

しかし、「遊動」という視点を導入することは、複数の生活拠点を有すること、つまり、“並住”という観点を生み出しうる可能性があるように思われる。

### 3. 人口減少および地域社会の存続可能性とどのようにつなげられるか

複数の生活拠点を有するという事は、これまでの地域社会学の中でもなかったわけではない。「二地点居住」や「交流人口」といった議論も同じ文脈に位置づけることができるであろう。ただ、これまでの議論は、過疎化現象—限界集落（限界自治体）、消滅可能性都市という枠組みで議論がなされてきた。そこでは、「農山漁村的要素が強い地域社会」と「都市的要素が強い地域社会」という区分が意識されていたように思う。しかし、遊動という議論は、両者をつなぎうる可能性を有するタームであるように考えられる。

このタームが意図する「複数の生活拠点」といった場合、一つの場所に必ずしも常住するとは限らないものであると、筆者は捉えたが、その場合、農村社会学の領域で、徳野貞雄（2015）が「修正拡大集落」もしくは「新・マチ・ムラ連合型地域社会」という用語を提出する中で、他出子に着目して、居住者ではない者による地域社会の維持の可能性を探っている。また、船戸修一（2021）も、他出子が地域社会に果たす役割についての研究を積極的に進めている。居住地ではなくとも、血縁に基づく関係者がいる土地であり、かつては自分も生活の場であったということを考えると、地縁と切り離すことは難しい。仮に、孫世代を担い手として想定しても、先祖の地という意味では地縁から開放されているとは言にくいものがあるだろう。

また、徳野や船戸とは異なるが、藤井勝（2013）は、グローバリゼーションが前提となった今日の社会で、ナショナルな単位に対比されるローカルという意味での「地方的世界」という概念を提起している。藤井の概念は、藤井が指摘しているように、「人と土地との結びつき」が前提となっているが、集落や自治会やコミュニティよりも広い範囲で、地域社会を捉えていかうとするものであった。

徳野や船戸や藤井の議論を見てきたが、いずれも土地という枠組みを前提としていると言えるのではないだろうか。地域社会学において、「居住」「人と土地との結びつき」という視点は、ある一定程度共有され、前提になっているように、筆者は捉えている。例えば、「若者の地元志向」というテーマであっても、「地元」とは、これまでの生活と無縁であつ

た場を想定することは難しい。もちろん、流入者として、その場所に関わることになったとしても、何かしらの契機を経て、その土地に対して、他の場とは異なる意味を付与することで、「地元意識」を持つようになっていくのではないだろうか。例えば、サーフィンを趣味として行う人びとが、自分たちがサーフィンを行う海岸を、「ホーム」として認識し、海岸の環境整備に積極的に関わること、また、恒常的に買い物や遊びに行く街を「ホームタウン」と見なして、街づくりに関わったり、自身の起業の場として選択することなどが考えられる。また、都市住民が、農山漁村に、趣味の場としてリピーターとなって、通ううちに、その地域に暮らす人と親しくなり、「親戚的な感覚」で、長年にわたって定期的に通うことも挙げられるであろう。つまり、その場に対する「物語」を、自身の中に構築することができるか、否かがポイントになってくるように思う。そのことは、「所有」という従来からの視点とは異なるが、他に代わりになる場所があるわけではなく、その「場所」でなくてはならないという意味で、“土地に縛られる”という点を見いだすことができる。

それでは、「遊動」という概念は、地域社会学の中にどのように位置づけることが可能であろうか。観光に来る人びとという意味での「交流人口」ではなく、「関係人口」という用語とつなげて考えることが可能ではないだろうか。「交流人口」も「関係人口」も行政用語であり、その点は考慮する必要もあるが、「関係人口」という用語は、地域社会にいかなる意味や効果をもたらすのかという点から、具体的な事例を踏まえての検討は必要になると考える。

#### 4. コロナ禍の移動

先にも触れたが、土地に縛られない形で、複数の拠点を持つ場合、それはどこでも良いというわけではない。

コロナ禍において、二地点居住とは異なるが、オンライン化による在宅勤務の増加によって、テレワークを行う際に、リゾート地などで勤務をしつつ、居住地ではできないことも楽しむというワークションや地方移住を行う人が増えたという変化が生じているという指摘がある。しかし、平井太郎（2021）は、「東京都からの転出先について 2019 年と 20 年を比較してみる。すると、移動先都内が依然 5 割を超え、周辺 3 県で 9 割程度がカバーされる構造は変わっていない。」と指摘する。平井は、この現象を、移動が regional な水準によって規定されているかどうかであるとする。そして、“「人」や「つながり」の魅力”や“「価値観の合う仲間」と「魅力的な」人「や「つながり」”といった要素は、関係性の構築という点においては寄与するが、移動という点には寄与する部分は小さいということを指摘した。平井の指摘は、先に見た藤井の「地方的社会」という枠組みでの地域社会の押さえ方と通じるものがあるのではないだろうか。

「地方移住」という事例は、注目されやすいが為に、個別事例としては取り上げられやすい。しかし、全体から見ると、大都市およびその周辺に居住している人が、大都市圏外に転居するという事は多くはないと理解することができるのではないだろうか。つまり、大都市を中心とした圏域に、人間が集まってきているという状況は、依然として続いていると考えても良いのではないだろうか。

ただ、こうした傾向があることに異論はないが、筆者は、「誰が、つまり、どのような人が、周辺地域に移動し／移動しないのか」ということを詳細に検討する必要があると考えて

いる。改めて触れるまでもないことかもしれないが、オンラインによる在宅勤務ができる職種とできない職種がある。そうした点にも触れていく必要があるように考えている。もちろん、個人情報の問題もあり、方法的限界もあるかとは思いますが、よりミクロな水準まで押さえていく必要性があるように感じている。

このことは、「遊動」という視点においても同様である。「誰が遊動しているのか／できるのか」ということの把握が重要だと考える。二文字報告の前提は、遊牧民や狩猟採取民の生活を捉える文化人類学の視点であることは、先に述べた。そうした社会は、社会全体が、定住を前提としない社会を理解するためには極めて有効な概念である。もちろん、定住が前提の社会では、「遊動」という視点は通用しないということを述べるつもりはない。現代の日本社会においても、ファッション関係のデザイナーの中には、日本国外にも複数の住居を持ち、定期的に居住地を移動している人びともいる。むしろ、ファッション関係や音楽関係やスポーツ関係の世界では、日本と国外に活動の場を求めることは、コロナ禍以前から特別のことではない。飲食店経営者にも、日本国内だけではなく、国外にも複数の店舗展開をするのみではなく、定期的にそれらの店舗を巡ることで、複数の拠点を持って生活している人びとが、少数ではあるが存在し始めている。もちろん、この逆もあり、東アジアや東南アジアや南アジア出身以外の外国籍の人びとが、東京という都市に、飲食ビジネスの場を展開してきている事例も増えている。これらの動きも、コロナ禍以前から存在しているものである。当然、ビジネスとして飲食店を経営していく限り、そこには経済的な理由（場合によっては、政治的理由があることもあるが）もある。したがって、ビジネスとして成り立たなくなれば、別の場所に移動する。そして、筆者がヒアリングしている限りにおいてはであるが、日本国籍を有する／有しないを問わず、こうしたビジネスモデルを持つ経営者（もしくは、独立志向を持つ職人の人びと）は、次に展開する可能性がある場所を、常にリサーチをしている。

また、単身赴任ではなく、子どもの教育のために、自身とは別の場所に、配偶者と子どもは日本国内外に居住の場を設け、自身は、週末や長期休暇の時に、配偶者や子どもが暮らす場に合流するという人たちが、筆者が調査している地域社会では現れてきている。これは二地点居住と見ることもできる。ただ、筆者のヒアリングの限りにおいてはであるが、子どもが学校を卒業すれば、今、配偶者と子どもが生活する場を引き払っていく可能性も小さくはないという。もちろん、子どもが学校教育を修了しても、そこに生活の場を置く可能性もあるが、定住志向とは限らないということは指摘できるであろう。

これらの事例は、きわめて限定的な事例であるかもしれない。だが、少数ではあるかもしれないが、そうした人びとはいかなる社会的属性や思考を有する人であるかを明らかにし、その人たちが、従来、地域社会という枠組みで捉えてきたものと、どのような関係を切り結んでいるのかを明らかにしていくことが、今後の課題になるように思う。

## 5. 最後に

コロナ禍における地域社会の変化ということを考えていく上で、「遊動」という視点を導入することは、一つの場所に根付くということではなく、複数の場の拠点を持つことによって、状況に応じて、「二の矢」「三の矢」としての生活の場を用意する人びとの存在を捉えようと、筆者は考える。しかし、コロナ禍が収束していない現時点において、アフタ

ーコロナ禍の地域社会を見通すことは、なかなか難しいように思う。ありきたりの表現になってしまうが、現在、どこにどのような人びとが生活し、どのような考えを持っているのかという記録を積み上げていくことが必要であるように思う。そして、その人びとを追いかけていくことを通じて、時間とともに、それらが、いかに変わったのか／変わらなかったのかを捉えていく必要があるように思う。その際に、「遊動」という視点を、いかに用いていくことが可能であるかが見えてくるように思う。

#### 【参考文献】

- 有末賢，1983，「都市祭礼の重層的構造—佃・月島の祭祀組織の事例研究」『社会学評論』33（4）。
- 船戸修一，2021，「『関係人口論』の地域社会学的考察——浜松市天竜区佐久間町の集落調査を踏まえて」『地域社会学会会報』219。
- 藤井勝，2013，「東アジアにおける地方的社会序説」藤井勝・小林和美・高井康宏編著『東アジア「地方的世界」の社会学』晃洋書房
- 平井太郎 2021「大都市—地方間の移動／関係への感染症拡大のインパクト」『地域社会学会ジャーナル』2。
- 伊藤泰郎・崔博憲，2021，『日本で働く—外国人労働者の視点から』松籟社。
- 奥田道大，1983，『都市コミュニティの理論』東京大学出版会。
- 玉野和志，2005，『東京のローカル・コミュニティ』東京大学出版会。
- 徳野貞雄，2015，「人口減少時代の地域社会モデルの構築を目指して—「地方創生」への疑念」
- 徳野貞雄監修、牧野厚史・松本貴文編『暮らしの視点からの地方再生—地域と生活の社会学』九州大学出版会。

## 2007年ブラジル調査紀行

小内 透

中澤国際交流委員長から海外調査の「こぼれ話」の執筆を依頼され、ブラジル調査の一角を紹介することにした。

私たちの研究チームは2005年から2007年まで、毎年夏休みに2週間前後のブラジル調査を行った。1年目は日本人移民の子孫が多いサンパウロとブラジル出稼ぎ協会のあるクリチバで日本への出稼ぎの状況とその影響について調べた。2年目はサンパウロ近郊スザノにある日系人移住地、通称「福博村」で出稼ぎ経験者と留守家族63人を対象にした出稼ぎの影響に関する聞き取り調査を実施した。3年目は東アマゾン・トメアスの日本人移住地で同様の調査を行った。ここでは、2007年のブラジル調査の一端を紹介しよう。

2007年8月17日、10名の調査団が成田からサンパウロに向け出発した。アトランタを経由しサンパウロに到着するのに25時間。1泊しブラジリアに向け、国内移動用の航空機に乗った。1ヶ月前、ブラジルで起きた国内移動用の航空機墜落事故が日本でも報道されたので、多少不安はあった。無事、ブラジリアに到着し、ほっとした。

翌日、ブラジル教育省を訪問。用意された部屋に入ると、公式の会議のように、机にネームプレートが置かれる形で会場が設営されていた。互いの挨拶の後、日本に滞在するブラジル人の子どもの教育問題について、教育省の考え方を尋ね、意見交換を行った。日本での不就学の問題やブラジル学校の教育環境の悪さなどを指摘し、ブラジル教育省の考え方などを問うた。とくに、日本にあるブラジル学校はブラジル教育省が正式に認可しているところでも、校舎がプレハブであったり、工場跡地の倉庫や倒産した結婚式場などを利用していたりすることを指摘し、実情を知った上で認可しているのかと質問した。すると、日本は土地が狭いので仕方ないとの回答があった。校庭がないので、体育の時間は公園を利用していることも伝えると、近く日本に行く予定なので、実際に視察をしてくると答えて、この話題は打ち切りになった。実情を把握しないまま、正式な学校として認可していることがわかった。

翌日、航空機でアマゾン東端の港湾都市、ベレンに移動した。一泊後、チャーターしたマイクロバスで東アマゾンのトメアスに向かった。途中、グアマ川を渡るのに船を使った。それほど大きくない船にマイクロバスだけでなく、トラックなども乗せられた。本当に乗り切れるのかと思ったが、ぎりぎりまで積み込み、何とか渡河することができた。ベレンを出てから5時間ほどでトメアスに到着した。

トメアスはアマゾンにおける最初で最大の日本人移住地である。1929年に移住が始まり、現在でも多くの日系人家族が暮らしている。日本への出稼ぎの実情と地元への影響を調べることが、今回の調査の主目的である。到着後、トメアス文化農業振興協会（ACT）で会長の大貫光晴さんと打ち合わせをした。翌日から1週間余の間に、54人を対象に聞き取り調査を行った。

私が担当した中に、トメアス文化農業振興協会・元会長の新井範明さんがいた。新井さんのお宅に訪問し、ライフヒストリーから始まり、家族の中で出稼ぎに出た方の実情とその影響などについて、お話しを伺った。

新井さんは北海道出身で、子どもの頃旭川に住んでいたとのこと。私が 10 年ほど旭川の北海道教育大学に勤めていたと話すと、旭川時代の友人として、かつての私の同僚だった亀畑義彦先生（経済学）の名前が出てきて、懐かしげに思い出を語った。

新井さんの父親は戦前から南米のペルーやブラジルで日本人学校の教師をしていたようだ。トメアスの日本人学校で教鞭をとったこともあるようだ。その影響もあってか、進学した上智大学では「移民研究会」に所属し、卒業後ブラジルに移民することにしたとのことである。1962 年にトメアスに入植したが、農業の経験がなかったため、ブラジルに渡る前に少しの間、町村農場で農業実習を行ったそうである。町村農場がある江別市は、私が住んでいる所でもあると告げると、何やらつながりがあると思ったようで、感慨深げな表情になった。私も同様な感覚だった。

新井さんの家は、息子と妻が日本に出稼ぎに行った経験がある。トメアスでは日本で当時認められていた「病院付添婦」の出稼ぎを経験した女性が多く、新井さんの妻も同様だった。彼女の話では、給料もよかったようで、そこで得たお金がトメアスの住民が共同で立ち上げたアサイー（熱帯のフルーツ）のジュース工場の資金になったとのことである。出稼ぎがアサイーのジュース工場建設の経済的基盤となり、世界で初めてアサイーの量産の成功をもたらしたのである。

新井さん自身は、出稼ぎをしたことがない。ピメンタ（胡椒）栽培を中心とした農業をしており、ブラジル人を雇用しているので、トメアスを離れることは考えられなかったそうである。女性がブラジル人労働者を管理するのは難しいからだと話してくれた。

新井さんは森を再生させながら様々な作物が収穫でき、肥料もほとんど必要ないアグロフォレストリーの取り組みをしている。胡椒を並列に植え、その間にバナナやマホガニーなどの高木、さらにその間に日陰が必要なカカオやクプアスなどを植える。コショウやバナナは 7 年ほどで枯れるが、その頃には、ほかの作物の収穫が増えていく。新井さんの農場では 30 種類の熱帯フルーツが収穫できるという。インタビューを終えると、新井さんが育てている森に案内してくれた。きれいな水をたたえた池と森の木々が癒しの場として整備されていた。別れ際に、ピメンタをお土産としていただき、亀畑先生と町村農場にも俳句が添えられた袋詰めのピメンタを届けるよう託された。

日本に帰国して調べると、亀畑先生はすでに教育大学を定年退職していた。何とか連絡を取ることができたが直接お会いすることができず、教えられた住所にピメンタを送った。町村農場は当学会の町村会長のご実家なので、町村先生に連絡を取った上で、直接お会いすることにした。町村農場の農場主・町村末吉さん（町村先生のお父様）は、初めてお会いしたにもかかわらず、快く応接室に招き入れてくださった。そこには、中国の国家元首として初めて来日した江沢民や日本の政治家など何人かの著名な方々の写真が飾ってあった。それを話題にすると、要人が来たときに使う部屋だと言ったので、大変緊張した。新井さんのこと、ピメンタを託されたことを伝えるうちに、習い性でご自身のライフヒストリーなどを聞いてしまい、1 時間ほど談笑させていただいた。帰り際には、お土産として牧場のアイスクリームをたくさんくださった。貴重な経験をしたひとときとなった。町村

末吉さんは2015年に亡くなられています。

調査と帰国後の出来事から、時間をこえて、トランスナショナルな人と人のつながりがあることを実感した。これも、国際調査の醍醐味なのかもしれない。

なお、新井さんは、2015年にトメアスの文化農業振興協会理事、日本語学校校長などの公職で尽力したということで旭日双光章を受勲した。その後、2018年に鬼籍に入られたとの情報が伝えられた。苦しさから逃れるのではなく、新しい世界を切り開こうとしてブラジルに渡り、力を尽くした一人の人間の人生の幕が下りたとの感慨を覚えた。



## 執筆者一覧

丸山 真央（滋賀県立大学）

二文字屋 脩（愛知淑徳大学）

牧野 修也（神奈川大学非常勤講師）

小内 透（札幌国際大学）

## Journal of JARCS No. 7

*The Program of 1st Serial Research Meeting of Japan Association of Regional and Community Studies*

*Article*

What have the Japanese regional and community researchers discussed during the COVID-19 pandemic?

Masao MARUYAMA

Rethinking Home: From the Findings of Hunter-Gatherers and Homeless People

Shu NIMONJIYA

*Review and Comment*

Potential of the Concept of Nomadism in Regional Sociology

Shuya MAKINO

*Regional and Community Studies beyond Borders*

Accounts of Research Trip to Brazil in 2007

Toru ONAI